

10分で学び直す  
「あの日、あの場所で」

第6回

終戦間際、証拠隠滅のため爆破されたという731部隊本部があった跡地

人体実験を繰り返したエリート医師たちの日常

# 731部隊の真実

## 人間は静かに狂う

彼らは何の疑問も持たずに  
生きた人間の腹を割いていた。  
誰もが持っている  
狂気の正体とは。





### 子どもや女性にも実験は行われた

凍傷実験を受けさせられるモンゴル人少年（左）。女性は主に性病治療実験用だった。年齢も性別も関係なかった

### 40人を一度に感染 生物兵器の人体実験

はりつけにした40人のマルタで細菌兵器を囲み、感染度を検証。弾丸の破片で死なないように厚い装備をさせた



### 人体実験される 「マルタ」と呼ばれた捕虜

足枷と手枷をはめられた中国人の捕虜。「マルタ（丸太）」は隠語。実験の犠牲者は3000人以上



### 非人道的な実験設備が充実していた



ペスト菌は鼠のノミで培養。右写真は鼠の飼育室だ。左は凍傷実験室。凍傷実験は冬に行われた。ハルビンの冬は昼間でもマイナス20℃

須永鬼久太氏

関東軍防疫給水部本部、通称731部隊。第二次大戦末期、満洲に拠点をおき、兵士の感染症予防や、衛生的な給水体制の研究を任務とする

同時に、秘密裏に人体実験、生物兵器の実戦使用などの行為に手を染めた細菌戦部隊だ。満洲・ハルビンにあつた731部隊の本部はまさに、魔窟。とりわけ、ごく少数の隊員しか入れなかつた「口号棟」は鉄条網と高压電線が張り巡らされた土塀に囲まれていた。そこが人体実験の舞台だつた。ペスト菌やチフス菌などに感染させ、生きたまま腹を割く。中国人やロシア人などの「マルタ（丸太）」と呼

人たりとも関東軍司令官の許可なくして構内に入つた者は銃殺に処す』と大きな字で書かれた張り紙を見たときは、驚きましたね。何やらものものしい場所に来てしまつたなと思いましたよ』（731部隊元少年隊員・

# 人体実験が連日繰り返された

## 周囲からは見えない マルタたちの牢獄

四角い建物には最先端の研究室が並んでいた。その中央にある縦長の建物が実験材料にされた人の牢獄だった



## 病原体を詰め込んだ 脅威の細菌爆弾

爆破時に病原体が熱で死滅しないように、爆弾が地上に着いたとき、少量の火薬、あるいは火薬なしに粉々に壊れる材料を使用

給水支援や衛生指導を行った。一方でチフス菌を川に流す生物兵器戦も実施。石井四郎隊長はこの行為が認められ、軍から表彰される



## ノモンハン事件でも 暗躍していた731部隊

怨嗟の眼差しを向けた。  
「血がにじみ、ある所ではピユーッとふき出す。(中略)  
下の方から取つていく。大腸、小腸、胃、肺、心臓と……。  
するとたちまち体がドカンと暗い袋のようになつてしまふ。

## 731部隊による生物兵器戦

	ノモンハン作戦	寧波作戦	常德作戦	浙贛作戦
出動期間	1939.8	1940.7~12	1941.11	1942.7~8
出動場所	ノモンハン	杭州~寧波	南昌	杭州・金華
出動人員	40~50名	100名	40~50名	160名
使用細菌	腸チフス	ペスト・腸チフス・コレラ	ペスト	ペスト・腸チフス・バラチフス・コレラ・炭疽
散布方法	川に流す	上空からまく	上空からまく	上空からまく

もちろん、心臓などはピクピク動いたままだ。残された首、頭がまだ少しずつ動いて、口がモグモグしている。軍医の形相はまるで夜叉のように変わつてしまつていた」(『日の丸は紅い泪に 第七三二部隊員告白記』より)

人体実験は、肉が溶けて、骨が見えるまで続けられた凍傷実験から、二人の捕虜の心臓をえぐり出し交換する、荒唐無稽としか思えない実験まで行われていたという。

731部隊は生物兵器も実戦使用した。ロシアとの国境紛争・ノモンハン事件では、チフス菌を川に流し、寧波をはじめとした中国の3つの都市に細菌の雨を降らせた。「私は細菌兵器の作成に従事していました。この細菌爆弾の開発が成功すれば、『戦局を変えることができる』と教育されていた(前出の須永氏)。ある日、須永氏がその日の任務を終え、別の班の隊員に、「今日、お前は何やつた?」と聞くと、平然と「今日は人体解剖」と話されたという。それが隊員たちの日常だった。

# 初代隊長・石井四郎とエリート医師の癒着



731部隊初代隊長 石井四郎

出世のために手段を選ばなかつた。人体実験も生物兵器も石井が指導した。最終階級は陸軍軍医中将



石井（左から2人目）の自宅での写真。妻（右から2人目）は医学者で京都帝国大学総長の荒木寅三郎氏の娘・喜代子だった



多額の研究資金を受け取った京大教授 戸田正三

石井四郎と親交が深く、現在の金額で2億5000万円を731部隊から受け取る。また多くの大学関係者を731部隊に出向させた

石井は「大将にならなくちやいかん」が口癖で、立身出世の願望が強い男だった。しかし、大学での研究で、何日間にもわたって実験を続けていた細菌が入ったフラスコを誤って壊すという失態を演じる。「研究者失格」と悟り、その野心は暗く捻じ曲がつていった。

大学卒業後、陸軍に任官した。軍医は自軍の兵の健康を

「悪魔の部隊」とも呼ばれた731部隊の初代隊長だったのが、陸軍軍医中将・石井四郎だ。今の成田空港近く、千葉・加茂村の大地主の四男として生まれた石井は一際目立つ180cm近いガツシリとした体格を誇り、また学問にも長けた地元では有名な秀才だった。ただ、村では秀才といつても、それは狭い世界の話。石井は京大医学部に進むが、浪人の末、かなり苦労しての進学だった。大学には、次元の違うエリートたちが集まっていた。

石井は「大将にならなくちやいかん」が口癖で、立身出世の願望が強い男だった。しかし、大学での研究で、何日間にもわたって実験を続けていた細菌が入ったフラスコを誤って壊すという失態を演じる。「研究者失格」と悟り、その野心は暗く捻じ曲がつていった。

## 石井とのつながりを深める 優秀な医学者たち

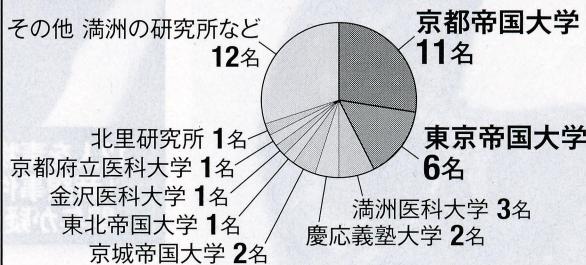
東大で開かれた微生物学会の集合写真。  
前列左から5番目が石井。その周りを全  
国から集まつた名だたる教授たちが囲む



### 731部隊の年表

1931 昭和6年	柳条湖事件、満洲事変勃発。石井四郎が細菌戦部隊の創設を提唱。
1932 昭和7年	陸軍軍医学校防疫部の下に石井四郎ら軍医6人が属する防疫研究室が開設。
1933 昭和8年	関東軍防疫班を創設。ハルビン東南の背陰河で研究が開始された。
1936 昭和11年	関東軍参謀長・板垣征四郎により、731部隊の前身となる関東軍防疫部が新設。関東軍防疫部は石井と同じ加茂村出身者が多くいたことから、通称「加茂部隊」と呼ばれた。
1939 昭和14年	関東軍防疫部がノモンハン事件で給水支援と衛生指導。腸チフス菌を川に流す細菌戦も展開。
1940 昭和15年	関東軍防疫部が「関東軍防疫給水部」に改編。そのうちの本部が「関東軍防疫給水部本部」、通称731部隊である。
1941 昭和16年	寧波作戦実施。寧波や杭州で上空からペスト菌やチフス菌をまく。
1942 昭和17年	常德作戦実施。中国中部の都市・常德でペスト菌をばらまく。
1945 昭和20年	石井四郎から北野政次陸軍軍医少将に部隊長交代。浙赣に細菌攻撃を敢行。
	石井四郎が部隊長に帰任。ソ連軍が満洲国に侵攻。731部隊など関東軍防疫給水部諸部隊は日本へ撤退。一部の隊員は侵攻してきたソ連軍の捕虜となり、ハバロフスク裁判(1949年)で戦争犯罪人として訴追される。

### 731部隊の技術(医師)の所属大学の内訳



守るだけでなく、細菌兵器を開発し、砲兵と同じように戦うべき。ドイツ留学で細菌戦の重要性を学んで芽生えた思想の元、石井は軍医としての地位を確かなものにすべく、細菌戦部隊の創設に尽力した。731部隊を組織するため、全国の大学を回って優秀な研究者を直接口説いていました。大ボラが吹ける男というか、話を誇大妄想的に大きくして、周囲の人間たちをその気にさせることに秀でていました。(『731 石井四郎と細菌戦部隊の闇を暴く』の著者でジャーナリストの青木富貴子氏)

731部隊の成功は彼にとって、重要な出世切符。資源の少ない日本にとって細菌兵器の有効性を触れ回り、陸軍の上層部をも説得した。石井が組織した731部隊は総額1000万円(現在の300億円ほど)もの、莫大な予算を獲得していく。この力で各大学医学部の有力者を懐柔した。さらに100万円という巨額の「臨時機密費」も支出されていた。石井はマルタを手配した憲兵への手数料を払ったり、本人の芸子遊びに使つたという。

# 消えた731部隊

## 隊員たちのその後

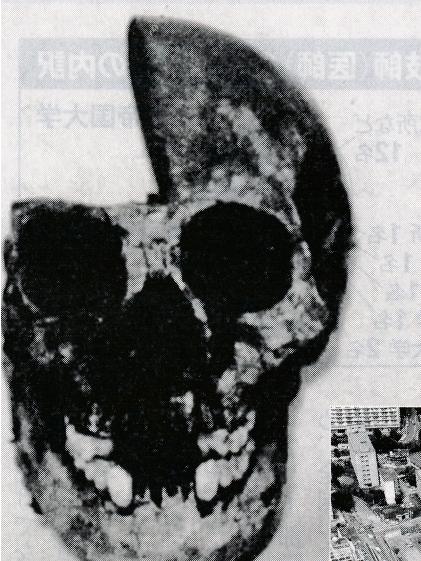
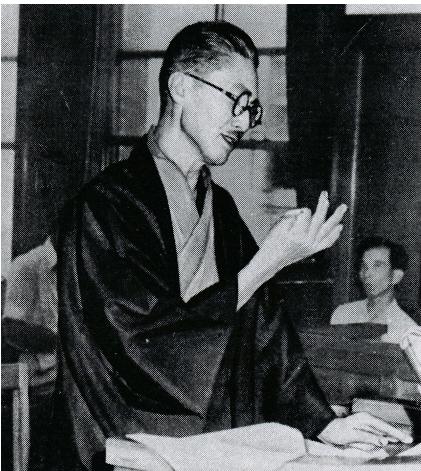
帝銀事件の現場写真。後に作家・松本清張も真犯人は731部隊の関係者である可能性を指摘している

12人を毒物で殺害  
「帝銀事件」への  
関与が疑われる

獄中死した画家 平沢貞通

帝銀事件の類似事件で使用された名刺を受け取っていたことなど、物証が乏しいまま死刑判決に。冤罪疑惑が根強い

平成になって発見された  
100体以上の人骨との関連



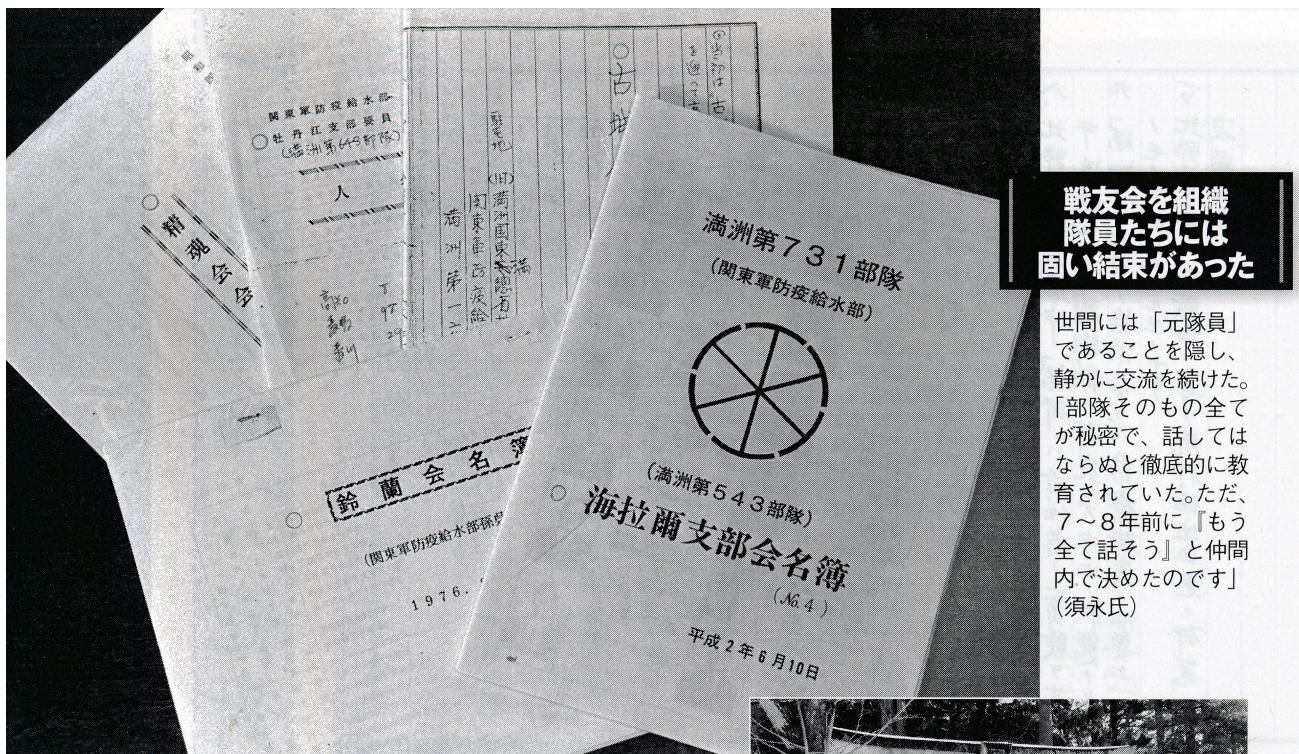
1989年、東京都新宿区の厚生省(当時)戸山研究庁舎建設現場(中央写真)で多数の人骨を発見。この一帯は終戦まで軍医学校があった場所だが、731部隊との関連は不明。現在、その場所に国立感染症研究所が建つ(右写真)

「戦」後は同期と戦友会を作り、年に数回の機関紙を発行してきました。またこの仲間で年に1~2回、旅行もしていた」(前出の須永氏)  
731部隊の関係者たちは戦後も医学界で重要な地位に就くものが少なくなかった。多くの大学関係者を部隊に出向させた京大教授の戸田正三は金沢大学の学長に、731部隊でチフス菌の爆弾を研究していた田部井和は京都大学の教授となり、細菌学の権威となつた。さらに、石井四郎の「右腕」と称された内藤良一は日本初の血液銀行となる「日本ブラッドバンク」(後のミドリ十字)を設立した。

ソ連軍の捕虜となり、ハバロフスクで戦争犯罪人として裁判にかけられ、監禁された元隊員たちは何事もなかったかのように社会に溶け込んでいったのだ。ここでも

「戦」後は同期と戦友会を作り、年に数回の機関紙を発行してきました。またこの仲間で年に1~2回、旅行もしていた」(前出の須永氏)  
731部隊の関係者たちは戦後も医学界で重要な地位に就くものが少なくなかった。多くの大学関係者を部隊に出向させた京大教授の戸田正三は金沢大学の学長に、731部隊でチフス菌の爆弾を研究していた田部井和は京都大学の教授となり、細菌学の権威となつた。さらに、石井四郎の「右腕」と称された内藤良一は日本初の血液銀行となる「日本ブラッドバンク」(後のミドリ十字)を設立した。

ソ連軍の捕虜となり、ハバロフスクで戦争犯罪人として裁判にかけられ、監禁された元隊員たちは何事もなかったかのように社会に溶け込んでいたのだ。ここでも



## 戦友会を組織 隊員たちには 固い結束があつた

世間には「元隊員」であることを隠し、静かに交流を続けた。「部隊そのもの全てが秘密で、話してはならぬと徹底的に教育されていた。ただ、7~8年前に『もう全て話そう』と仲間内で決めたのです」(須永氏)



### 731部隊の 仮本部が 置かれた神社

日本に引き揚げた731部隊は金沢市の野間神社に仮本部を設け、部隊の残務処理をした。金沢は陸軍病院などがある軍都だった



石井四郎の右腕 内藤良一

内藤は731部隊で細菌兵器の開発や人体実験に関わった。戦後は後に薬起害エイズ事件を起こす日本ブレッドバンク(後のミドリ十字)を設立

一方で、731部隊の影を感じさせる出来事も起きる。その一つが帝銀事件だ。1948年、東京都豊島区の帝国銀行椎名町支店に男が現れ、行員と家族計12人を殺害し、現金を奪った。男は「伝染病

石井四郎の暗躍があつたとい  
う。「石井は秘密裏にGHQのマッカーサーと交渉をしていたと言います。人体実験の詳細なデータを渡す代わりに、部隊員を免責するという取り決めを交わしていたのです」(前出の青木氏)

1989年には、現在の国立感染症研究所が建つ新宿区戸山で、大量の人骨が発見された。100体以上の人骨のなかには、頭の半分を切り取られたものもあった。戸山には元々陸軍軍医学校があり、そこで脳外科手術の「練習」が行われたのか、あるいは731部隊など国外で活動した部隊の「実験」の被害者のか、その関連は明らかになつてない。

物を飲ませたのだ。  
「731部隊の前身に当たる東郷部隊では人を毒殺する訓練をしていました。その毒とは帝銀事件に使用された青酸化合物でした。また、敗戦後、日本へ引き揚げる際には、全員に青酸化合物が配られていたため、元隊員が疑われ、警察に取り調べを受けたのです」(七三一部隊 生物兵器犯罪の真実)の著者で神奈川大学名誉教授の常石敬一氏)  
しかし、GHQによるとみられる圧力のため、急に捜査方針が変更され、事件は迷宮入りした。

石井四郎の暗躍があつたとい  
う。

物を飲ませたのだ。  
「731部隊の前身に当たる東郷部隊では人を毒殺する訓練をしていました。その毒とは帝銀事件に使用された青酸化合物でした。また、敗戦後、日本へ引き揚げる際には、全員に青酸化合物が配られていたため、元隊員が疑われ、警察に取り調べを受けたのです」(七三一部隊 生物兵器犯罪の真実)の著者で神奈川大学名誉教授の常石敬一氏)  
しかし、GHQによるとみられる圧力のため、急に捜査方針が変更され、事件は迷宮入りした。

# データと引き換えに罪を逃れる

一〇及保作ハ絶對ニ出サズ

北野中將へ連絡事項

一〇及保作ハ絶對ニ出サズ

二、關防給ハ石井隊長以下尚在滿

三、増田大佐ハ萬難ヲ排シテ單獨歸還シマ司令部

ヘ出頭セリ

四、關防給ハ總務部長兼第四部長大田、第一部長

菊池、第二部長坂、第三部長兼資材部長

増田大佐トナリ其他ハ轉出又ハ解隊シアリ

五、第一部研究、第二部防疫實施並指導

第三部給水實施並指導及資材修理

第四部製造、資材部 資材保管補給

ヲ担任シアリ。

六、七、八棟一中央倉庫、田中班一P研究、八木澤班  
自營農場ニ使用シアリ

七、保研レハ關防ハ石井隊長増田大佐以外ハ綜合的ニ知レルモノナラン

研究ハ細分ニテ常二人ヲ代ヘテ之ニ當ランメアルヲ以テ他者ハ部分的ニ之ヲ知レルクミナリ而モ其の目的ハ

知得シアラザルナラン

八、北野中將在職中「保研」ハ前任者ノ實績ヲ若干追試セん外積極的ニ研究セズ中止、狀態ナリ

九、保研ハ上司ノ指示ニテアズ防禦研究、必要上一部ノモノガ研究セルモノナリ

一〇、北野中將ハ在職中專ニ流行性出血熱、研究ニ没頭セリ

## 2代目隊長に向かた「口止め」文書

731部隊2代目隊長の北野政次が米軍から尋問を受ける直前、内藤良一によると思われるメモを渡される。「〇」は「マルタ」、「保」は細菌戦を示す。「作」は「作戦」。「出さず」は「話すな」という意味

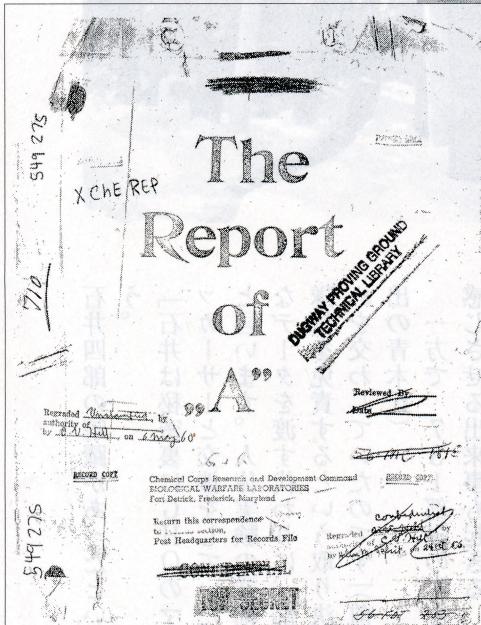
## 戦

731部隊の人体実験のデータを元にアメリカでは生物兵器が開発された。なかでも重宝されたのが、731部隊で病理研究をしていた石川太刀雄が、終戦前の'43年にハルビンの本部から日本に密かに持ち帰っていた8000

枚のスライドだつた。『「彼が自分の私利私欲にかられて単独で持ち帰つたとされています。しかし、実際のところは、石井四郎が裏で操っていたはず。アメリカに負けた際、免責にされるための交渉の切り札にすべく、早いうちに実験データを国内に移していたのではないか』（前出の青木氏）

## アメリカが重宝した731部隊のレポート

731部隊の医師・石川太刀雄が日本に持ち帰ったレポート。人体実験を元にしたペスト菌、炭疽菌、鼻疽菌についてのこのレポート提出が決め手となりGHQは隊員を免責にした



石井四郎ら上層部の姿勢は一貫していた。責任をとらない。そして、マルタと生物兵器のことは、公にしない。

「終戦間際、ソ連が満洲との国境を越えて侵攻してきたとき、証拠隠滅のための命令が下りました。私たちは2日間かけて、本部の研究室をハンマーで破壊した。一部の少年隊はガソリンをかけて火をつけ、マルタを燃やしていったようです。」

今思えば間違いでした。でも当時は、良心の呵責はなく、それが当たり前だと思つてたんです」（前出の須永氏）

# 知ろう「731部隊」の実態

講演と資料解説  
2月8日、9日

府中市で

戦争中、中国東北部ハルビン市郊外で、捕虜を「マルタ」と称し人体実験を行つた石井四郎隊長率いる関東軍防疫給水部、通称「731部隊」。戦後アメリカに資料提供することで、戦争犯罪は免責され、元隊員たちは各大学や医学界、自衛隊（の衛生学校や化学学校）に復帰している。

講演会＝2月9日14時、講師の松村高夫さんは、慶應義塾大学名誉教授で、同部隊による人体実験や細菌戦の犠牲者の裁判でも意見書提出や証言をおこなつてゐる。500円。会場は府中市立教育センター（府中駅北口7分）。

10時～17時。核・生物・化学兵器廃止を資料解説＝2月8日12時～18時、9日



旧日本軍による毒ガス戦の訓練の様子。現在化学兵器禁止条約によって使用は禁止されているが陸上自衛隊化学学校では研究、防護のためと称して毒ガスを製造、訓練を行っている

追求するABC企画委員会事務局長で「731部隊資料開示請求裁判」原告の和田千代子さんが会場で解説する。無料。

「秘密保護法や個人情報と称して、731部隊の資料を開示しない防衛省の隠ぺい体質は、資料を出さない『桜を見る会問題』に繋がっている。731部隊は今の問題」と、主催の同実行委員会の郡司實さんは言う。

員会（郡司さん）

☎ 090-1431-1607 同実行委